



【恩師と弟子】 集い敬う多くの学者

「田中館先生の会」と書かれた写真がある。1940（昭和15）年5月千葉県姉ヶ崎で弟子と親しく過ごした時のものだ。田中館愛橋が弟子たちに愛され、大事にされたことが分かる一枚である。

当時84歳の田中館は3選の貴族院議員で、帝国学士院第二部部长も務めるなど要職も多く、意気盛んだった。しかし耳が遠くなるなど老化もみられ、傘寿を過ぎてからの外出には、娘美稲さんが付き添うようになった。いろいろな会議や学界に出席する「博士と令嬢」は、いつも温かく迎えられたという。1883（明治16）年に東京大学の助教授に任ぜられて以来、田中館は長



「田中館先生の会」という集まりで千葉県姉ヶ崎で弟子たちと過ごす田中館愛橋（右から7人目）＝田中館愛橋記念科学館提供

岡半太郎（物理学者）をはじめ、多くの弟子を育ててきた。中でも田丸卓郎（岩手県出身の物理学者）と寺田寅彦（物理学者・随筆家）の2人は航空研究所やローマ字運動を共にし、関わりが深かった。

田丸は師の長岡半太郎をして、「ローマ字運動は田丸の才能を浪費する」とまで嘆かせたほどの人物だったが、田中館と共に一生をローマ字運動にささげた。田丸が病軀を押しして3時間ものローマ字普及演説を行い亡くなったと

き、田中館はソ連のウラジオストックで訃報を受け次の句を詠んだ。

「身を忘れ家をわすれて一筋に国につくして果てし君かも（原文ローマ字）」

東京清林寺にある田丸の墓碑は田中館の筆で「Tamaru Takurō no haka」とローマ字で書かれた。

寺田寅彦が亡くなった時、田中館はローマ字仲間の二人の物理学者が世を去られることは痛ましい限り」と深くその死を悲しんだ。

水沢緯度観測所初代所長の木村栄が亡くなる直前、床に伏す木村を見舞った田中館は、添い寝するように耳を傾けその言葉を聞いた。妻は田中館に研究を託す最後の会話と、妻さえ入り込めない深い師弟愛に驚いたという。

田中館を慕い敬う弟子が多かったことは、中村清二（地球物理学者）、小野澄之助（地球物理学者）、本多光太郎（物理学者）、今村明恒（地球物理学者）らの残した著書からも知ることができる。

1946（昭和21）年、田中館の郷里福岡町（現二戸市）に本多光太郎ら著名な博士たちが訪れた。夕食になり膳が運ばれたが、誰も箸を取らない。重ねて勧めると、「館先生が召し上がらぬのに我々が頂くことはできません」と遠慮し、福岡の人々は初めて田中館は本当に偉い爺さんなのだ驚いたという。

（中村誠二 田中館愛橋会事務局長）

【ミニコラム】 飛び乗りにハラハラ 交通局から小言

晩年の田中館は移動に都電をよく利用した。ところが交通局から度々自宅に電話が入った。

「今後は田中館先生の飛び乗り、飛び降りは、絶対にやめさせてください」という注意であった。

田中館は電車を待ち受けては飛び乗ったり、乗り過ぎて飛び降りたりしたのだという。白髪の少し背の丸くなった老人の行動に、周りはハラハラしたらしいが、当の本人は涼しい顔だったという。